○月×日、今日の出来事。

小仁沢　為絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
○月×日、今日の出来事。

【Ｎコード】
Ｎ９２００Ｚ

【作者名】
小仁沢　為絵

【あらすじ】
兄弟五人。　みんなで仲良く交換日記。
＊自サイト掲載作品・連作短編・不定期更新

十年後の夏

○月×日　晴れ

今日、空からノートが降ってきた。

と言っても、そのノートに名前を書くと人が死ぬとかいう物騒なものではない。

それはＡ４サイズのノート。ひまわりの写真がプリントされ、タイトルは『絵日記』となっていた。

誰かの日記帳かと思ったら、表紙の氏名欄には汚い字で『１年１組よろずやきょーだい』と書きこまれていた。

それを見て思い出した。昔々……俺らが小学１年の夏休み、宿題に絵日記が出されただろ？

その時、確か伊吹が、

「毎日日記なんて書けないよ。何書いていいかわかんないんだもん」

なんて泣き言みたいな文句を言ったんだよな。

それに俺らは賛同して、誰かが、誰だったのかまでは覚えていないが、「五人で交換日記をやろう」って言いだした。

何をするにも五人とも一緒なんだから、日記に書く内容も五人とも被るに決まってる、だったら同じ内容の日記を五冊書くより、五

人一日交代で一冊の日記を書くほうが、俺たちも、夏休み明けに宿題をチェックする先生もいいに決まってるって。

画期的な提案だと思ったんだけど、結局先生にも母さんにも怒られたんだよな。

懐かしくなって中を見てみたら、改めて納得した。

夏休み中は何をするにも基本的に五人で一緒に行動していたのにも関わらず、何故か内容は五人ともてんでばらばらなことを書いていたんだから、あれじゃあ確かに先生も怒るわけだ。

そう、例えば……俺の場合なら未来日記。

と言っても、そんなたいそうな内容じゃない。明日の天気とか近いうちに起こりそうなこととか、自分でこうだったらいいな、って思うことをつらつらと記していただけ。もはや日記じゃない。

蓮花は近所に住んでたカッコいい高校生のお兄さんのこととか、よく見掛けるイケメン郵便配達員のこととか、男に関することばっかり。ある種の観察日記みたいなもの。

豹雅はまともな日記らしく、一日の出来事を書いてた。

でもその内容は痛々しくて、ある時は石につまづいて転び、ある時は野良猫にひっかかれ、ある時は近所の凶犬に追い回され、ある時は樹里と伊吹の喧嘩に巻き込まれ・・・あいつが日記を書く日はいつでも騒がしくて、その騒ぎに豹雅はいつも巻き込まれてた。まったく不憫な奴。

そんな豹雅と対象的なのは樹里。絵と文で一ページを埋めようと一生懸命な豹雅に対し、樹里は決まって二行しか書いてなかった。

『今日も皆で遊んで楽しかった。以上』。

小学校一年生の女の子にしては冷めてるというか、ある意味男らしいというか。

樹里の性格からするにただ単純にめんどくさかっただけかもな。

なんだかんだで一番やる気があったのは伊吹だったかな。

食いしん坊らしく、その日の朝食・昼食・三時のおやつに夕飯、何が美味しかったか、どれほど美味しかったか、事細かに記していたよ。

その意欲を勉強にも発揮できればいいのに。

こうやって見てみると、俺たちは同じ兄弟で、いつも一緒にいるのが当たり前だったけど、あの頃から見ているもの、興味の対象が全然違ったんだな。

きっと今やったら、あの頃とはまた違った個性が見えるんだろう。

俺に出来て、蓮花には出来ない。

蓮花に出来て、豹雅には出来ない。

豹雅に出来て、樹里には出来ない。

樹里に出来て、伊吹には出来ない。

伊吹に出来て、俺には出来ない。

気付いてないだけで、きっとそういうものがあるんだろうな。

一通り日記を読んでから、俺は家へ戻った。

きっと母さんが二階の押し入れの片付けでもしていて、間違って窓から落としてしまったんだろう、そう思って。

ところが母さんは押し入れの片付けなんかしていなかった。

俺たちの部屋で、いつまでも起きようとしない伊吹の布団をひっぺがすのに夢中になっていた。

もちろん、絵日記を見せて、空からノートが降ってきたことを説明をしたが、母さんは何も知らないと、不思議そうに首を傾げながら言った。

伊吹は寝ていたし、豹雅は出掛けていた。

蓮花と樹里は一階の居間でテレビを見ていたし、いったい誰があの絵日記を落としたのか。

いや、よくよく考えたら、家の裏側に面する二階の窓から、庭先にノートを落とせるわけがない。

あのノートは本当に空から降ってきたのだろうか。

真相はわからない。だけど、一つだけわかったことがある。

あのノートは見つかるべくして見つかったんだということ。

その証に、ノートの一番最後のページ、夏休み最後の日の日記は俺の言葉で締め括られていた。

『夏休みが終わり、交換日記も終わってしまいました。

僕はすごく楽しかったし、みんなも楽しかったと思います。

だけど楽しいことはいっぱいあるから、きっと交換日記のことを、僕らは忘れちゃうんだろうと思います。

それならそれで、忘れちゃうのは仕方ないから、例えば十年後、僕らが今よりもっとずっと大きくなったら、このノートを見て、みんなで楽しかったねって笑って、大きくなったみんなと、また交換日記をやりたいです。』

つまり、そうゆうことらしい。

これが当時の俺が書いていた未来日記の集大成なのか、ただの偶然なのかはよくわからない。

どっちにしろ、あれから十年、十七歳の夏休み初日にこのノートを見つけたからには、日記を書かないわけにはいかないだろう？

そんなわけで、俺は今、これを書いている。

午前２時４２分。

隣の部屋からドッタンバッタン賑やかな音が聞こえる、きっと寝相の悪い樹里がまた壁にぶち当たっているんだろう。

こちらでは豹雅も伊吹も大人しく寝ているっていうのに。

これを書いたら俺も寝ることにしよう。

明日……もう今日か。朝になったらこのノートをまず、蓮花に渡そう。

強制はしないが、七歳の俺が見た、ささやかな夢に付き合ってもらえると、とても嬉しく思うのだが。

如何だろうか。

☆

「というわけだ」

「ちなみに夏休み交換日記の言い出しっぺはハツだよ」

「そうだったか？」

「俺はやりたい交換日記！　あれけっこう楽しかったんでよねー。学校別れてからお互いになにしてんだかイマイチよくわかんなくなっちゃったしさー」

「私も是非参加したいわ」

「僕もいいよ。ジュリーは？」
「本当はめんどいからやりたくないけど、皆がやるってんなら付き合うわ」
「タイトルはどうする？」
「シンプルに『交換日記』でいいんじゃないかしら？」
「面白味にかけない？」
「ノートのタイトルに面白味を求めなくたっていいじゃない。誰に見せるわけでもないんだから」
「んじゃ『今日の出来事』は？」
「交換日記は必ずしも『今日』あったことを記すものではないぞ」
「あら、いいじゃない。そこまでこだわらなくても。書くことに意味があるんだから。今日あったこと、今日思ったこと、今日見た夢のこと、今日思い出した昔のこと……」
「つまり何でもありってことなんだね」
「まっ交換日記なんてそんなもんでしょ」
「毎日書かなきゃいけないの？」
「いや、みんなそれぞれ都合があるだろうから好きな時に書けばい

いよ。俺は五人で楽しく交換日記が出来ればそれでいいんだ」

「交換日記なんて久しぶりだわ」

「女の子は好きだよね、そーゆーの」

「あたしは嫌いだった。めんどくさくて、途中で嫌になるのよね」

「いいねーこーゆーの、仲良し兄弟って感じ」

「まぁ、途中で飽きるかもしれないけど……とりあえずノート一冊分は頑張ろうな。ご協力よろしく」

「「「「はーい」」」」

飛んで火にいる

○月×日　晴れ（たぶん）

交換日記なんて小学生以来で、何だか緊張するわ。

初亥は夜中に書いたみたいだから、私も夜中、というか明け方かしら？　午前４時２８分、これを書いてます。

一人文机に向かって蝋燭の灯りだけで書き物をする……明治の文豪にでもなった気分。

明治の文豪なんて誰がいたか咄嗟には思い出せないのだけど。

それに実際に私が向かっているのは文机じゃなく、小学生の頃から愛用してる勉強机だし、灯りは蝋燭じゃなく一般的なスタンド照明なんだけれど。

さて、何を書こうかしら？

そう、この前ちょっと不思議な人を見たから、その人のことを忘れないうちに綴っておこうかしら。

不思議な人、と言っても、その人自身は何処にでもいそうな平凡な人なんだけれども、状況が不思議というか、おかしいというかなんというか。

先週、私の学校で球技大会があったの。

学期の終わりが近づくと、何処の学校でもやるんじゃないかしら。

厳選なるくじ引きの結果、私は運悪く、サッカーに出ることになっちゃったのよね。

本当はバレーかバスケがよかったのに。

サッカーは屋外だから暑いし、焼けるし、いいことないわ。

それに女子のするサッカーって、何だか怖くなあい？

皆でボールに群がって、手を使っちゃいけないから、必死になって足を出すんだけど、うまくボールを蹴れずに足を蹴っちゃったり。

男子のやるサッカーに比べ、スマートじゃないのよね。

まさに醜い女の争い。

少なくとも私の学校ではそうなのよ。

しかも、やたら負けん気の強いこが多くて。

たかだが球技大会で、ものすごーく熱くなって、ミスすると怒るし、負けると泣くし、で大変なんだから。

あら。関係ないことばかり書いてしまったわ。

私がその人に出会ったのは球技大会の日。

サッカーに出たくなかった私は貧血気味でふらふらするって保健室に逃げ込んだ。

平たく言えばおサボりしたのよ。

保健の先生はベッドで寝ていなさいとおっしゃった。

ちょっと職員室に行くけど、鍵をかけるし、すぐ戻るから大人しく寝ていなさい、と。

お言葉に甘え、私はベッドで寝かせてもらった。

保健室は涼しくて、私以外に誰もいないから、しんっと静まり返っていた。

それなのに、どれくらいたってからか、何となく人の気配を感じて目が覚めたの。

熟睡していたわけではなく、ちょっとうとうとする程度だったから気付いたのね。

誰かに見られてる、そんな気がしたのよ。

先生が戻られたのかと、カーテンの隙間から向こうを覗いてみたけど、誰もいない。

念のため、一度ベッドから降りて部屋を点検したんだけれど、やっぱり誰もいない。

ついでにいうならドアにも窓にも鍵はかかっている。

なのに何故か、私以外の誰かがこの部屋にいるような気がしてならない。

さぁ、これはどうゆうことかしら。

ベッドに座り直し、目を閉じて、神経を集中し、考えてみた。

そうしたらね、私ったらなんて勘が冴えてるのかしらねえ、昔聞いた都市伝説を突然思い出したの。

斧男って知ってる？

パターンはいくつかあるんだけど、斧を持った男がベッドの下に隠れてるって話。

気になったら是非調べてみて。

もしやと思って、ベッドから飛び降りて、下を覗いてみたら……いたのよ、斧男が！

正確に言うと斧男じゃないわね、だってその人、斧を持っていなかったから。

あ、でも代わりにカメラを持っていたわ。

男の人、と言うより、少年。

何処の学校かはわからないけど、制服を着ていたわ。

ベッドの下、床の上に横向きに寝そべって、カメラ片手にはぁはぁ荒い息をしているの。

あんまり呼吸が荒いんで具合が悪いのかと思って、

「どうされました？大丈夫ですか？」

と声をかけてみた。

カメラ少年はぎょっとしたように、

「え、自分ですか？」

自分のこと、「僕」でも「俺」でもなく、自分て言うの。

変わってると思わない？

「ええ、あなたに言っているんです」

「そうですか。それはお気遣いいただいて申し訳ないです」

「具合が悪いんですか？」

「あ、いえ。全然平気です。元気です」

「それはよかった。人間元気が一番ですものね」

元気ならそれに越したことはないわ。

だけど、こんなところで何をしているのか、気になってね、

「ところで、何をなさってるんですか？」

と尋ねてみたの。

「写真を撮っているんです。自分は写真部なもので」

「まぁ、素敵ですね。どんな写真を撮っているんですか？」

「主に女子高生を」

「女子高生？」

「はい。女子高生の実態をテーマに写真を撮っているんです」

「ああ、それで」

ようやく合点が行った。

きっとこの人は先生が球技大会の写真をとるために呼んだ他校の男子生徒なんだわ。

うちの学校は他校生との交流と称して、お茶会や合同学芸会（吹奏楽、演劇などの芸術系の部活動の発表会）をよく行っているから、きっとその一種で、今回は他校の写真部を招いて、学校新聞用だか卒業アルバム用だかの写真をとらせようと考えたのね。

でなかったら、女子校に男子がいるなんておかしいものね。

そう納得しかけたんだけれど、考えてみたら、球技大会の写真を

撮るのが目的で来たなら、保健室の床で寝ているのは職務怠慢なのではないかしら？

私がそう思ったことに気付いたのか、ベッドの下の彼は申し訳なさそうに、

「あなたはしとやかで思慮深い方に見えるから言いますが、実は自分、忍び込んだんです」

なんて言い出したの。

「保健室にですか？」

「あ、はい。保健室もそうなんですが、学校に忍び込んだんです」

「まぁ。何故そんなことを？」

わざわざ忍び込まなくても、学校に用事があるなら事務室で用件を伝え、来校者名簿に名前を書いて、来校者証を首から下げればすむだけの話なのに。

おかしなことをする人だわ。

「だって、『女子高生の写真を撮りたいんです』なんて正直に言っても通してもらえないでしょう？」

「部活動の一環だときちんと説明すれば先生方も許してくださいますよ、きっと」

「無理ですよ。それに自分は既に忍び込んでしまったんです。誰の

許可もなく。今更のこのこ事務室に行っても不審者扱いで警察につき出されるだけです」

そう思うなら始めから事務室に寄ってくればよかったのに。

偽りの来校理由なんて、いくらだって思い付くでしょうにねえ。

そこまでして女子高生の写真が撮りたかったのかしら？

「夢だった女子高に潜入し、また夢だった女子高生の寝てるベッドの下に隠れることができ、さらに夢だった女子高生の寝顔の写真も撮ることができ、自分は満足です。もう思い残すことは何もありません」

写真一枚で思い残すことはないだなんて、大袈裟な人よね。

でもね、あの人、寝顔の写真って言ったのよ。

「あなたが撮った寝顔の写真というのは、もしかして私の？」

彼は満面の笑みを浮かべて頷いたけれど、私は笑えなかったわ。

「私の許可もとらずに勝手に写真をとったというんですか？それって失礼じゃありませんこと？」

私が少しばかり強い口調で言うと、彼はベッドの下で縮こまって、「すみません」と言ったわ。

すみません、じゃ、すまないわよ、レディのベッドの下に隠れていた上に勝手に写真を撮ったんだもの……なんて書いたら初亥や樹

里に「誰がレディだ」なんて言われちゃうかしらねえ。

でも小さなことにいつまでも拘るのは性分じゃないから、それ以上は咎めなかったの。

「写真の件はもうけっこうですわ。ですが、あなたが正規の手続きを踏んだ来校者でないのなら、そろそろお引き取り願えませんか？」

ひどい奴なんて言わないで頂戴ね。

知らない少年、しかもベッドの下に隠れてる謎の少年と保健室で二人きりのところを誰かに目撃されたら、私まで先生に怒られてしまうかもしれないじゃない？

それから彼は、

「すぐに消えます。お騒がせしました。でも保健の先生がそろそろ戻ってくるので、少し時間をください」

と言った。そうしたら本当に鍵を開ける音が聞こえたから、慌ててカーテンをしめて、ベッドから離れたの。

戻られた先生に気分がよくなったから教室に帰る旨を伝え、よくお礼を言ってから外に出た。

でもやっぱり、あの人のことが気になってしまってね、すぐにもう一度保健室に戻ったの。

ハンカチを忘れたみたいだと嘘をついてね。

私が保健室を出てまた戻ってくるまで、たぶん一分もかかってないわ。

「失礼しました」と頭を下げ、ドアを閉めてから、二十歩ほど歩いて、やっぱりって戻ったんだもの。

その間、保健室のドアが開閉される音は聞こえなかった。

なのに、ベッドの下には誰もいなかったのよ。

おかしいでしょ？

先生に、

「私が出たあと誰か出ていきませんでしたか？」

と聞いたんだけれど、先生は、

「あなた以外に休んでる人なんていなかったでしょ？」

とおっしゃっていた。

不可思議な話。

私が見たあの人は、いったい何者だったのかしら。

どこからどうやって出ていったのかしら。

それとも……本当はベッドの下に男の人なんて隠れていなかった

のかしら。

すべて私がうとうとしてる間に見た夢で、現実じゃなかったのかしら。

皆はどう思う？

……あら、夢中になって書いてたら、朝御飯の支度をする時間になってたわ。

次は、豹雅ね。楽しい話を期待しているわ。

☆

「誰がレディだ」

「ほらやっぱり、初亥はそう言うと思ったわ」

「えっと、これは何から突っ込めばいいんだろう？」

「お姉、何もされなかったんでしょうね！？」

「大丈夫よ。あの人は写真を撮っていただけみたいだから」

「写真を撮ると魂取られるって言うよね」

「嫌だわ、豹雅ったら、そんな昔の人みたいなこと言って」

「でも、さーすが、れんちゃん、落ち着いてんねー」

「落ち着いてるっていうか、こいつには危機管理能力がないんだろ」

「もうちょっと気を付けなさいよね！変な人だったらどうするのよ！？」

「いや、女子校に忍び込んだ時点で十分変な人だろ」

「とにかく、何もなくてよかったね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9200z/

○月×日、今日の出来事。

2011年12月28日20時51分発行